

腹腔鏡手術

中村 龍介

空そらの上には何がある？ ええっと、太陽かな。違うよ。空の上には「死」があるんだよ。？？？だつて、音楽であるじゃないか、ドレミファソラシドつて。

子供のころに流行った他愛もないジョークだ。が、「空」を空間と解釈すれば、最近のニュースで伝えられる大病院での手術ミスによる死亡は、あながち「空」と無関係ではない。人体の下腹部で、横隔膜と腹膜とに囲まれてできた小さな空間を「腹腔」と呼ぶ。そこに内視鏡を差し込んで行う手術が「腹腔鏡手術」だ。

舌を噛みそうな名前でアナウンサーを困らせる、この難解な医学用語に私が初めて出逢ったのは二十年近く前のこと、しかも英語だった。

当時、私は家内と中学生の末娘を帯同してアメリカに駐在していた。赴任早々、家内が脳出血で倒れ、大手術の末一命は取り留めたものの長期入院してしまった。英語も覚束ない末娘と二人では、会社・家事・介護の三K生活は無理だ。

大学二年生だった三女の麻子を日本から呼び寄せて手伝つて貰うことにした。その麻子は、来米して二年目の夏、奇妙な病気に罹る。血小板が少なくなる病気で「ITP（突発性血小板減少性紫斑病）」という。

これは、血小板に正体不明の物体（Xと呼ぶ）が取り付く病気で、物体X自体は無害なのだが、血液が脾臓を通過して浄化される際に、脾臓が物体Xを外敵と判断してこれを攻撃し、血小板もろとも破壊してしまう。このため、血小板がほとんど少なくなっていくのだ。血小板が少なくなると、出血が止まらなくなる。

実際、麻子は蚊に刺されただけで血が止まらず、刺された個所が大きく腫れ上がり紫斑ができた。この病気は、当時、日本の厚生省の難病指定を受けており、これを治すには、脾臓を摘出してしまおうしかない。脾臓は血液を浄化するフィル

ターなので血の塊だ。手術のやり方によっては出血多量で死亡するケースもあると聞く。

ミシガン大学病院を訪ねた。麻子を診察した若い医師は、この手術を内視鏡による最新の方法でやりたいと主張した。ラパロスコピック・スプレネクトミーと書かれた難しい単語を医学用語辞典で調べると「腹腔鏡による脾臓摘出手術」とある。家内のときもそうだったが、医学の専門用語は私の判断力を超えていた。医者に任せるしかないかと思っただが、念のために日本に問い合わせることにした。

会社の同僚のA氏の弟、茂隆氏はT大医学部を卒業し、当時、日本血液学会の重鎮として活躍していた。私はトルコ駐在の時代に、A氏に頼まれて、血液学会で来訪中の茂隆氏をイスタンブール観光に案内したことがあった。

思いきってT大病院の茂隆氏に電話を入れた。偉い先生らしく捕まえるのに苦労したが、漸く電話口に出た茂隆氏は、ぶつきらぼうに言った。

「やめなさい。それは単なる売名行為です。日本で内視鏡による脾臓摘出手術なんて実施例がない。」

茂隆氏の話聞いてから益々心配になった。あの若い医師は功名心から難しい手術を勧めているのではないのか。

翌日、再度ミシガン大学病院を訪ねた。

「昨日、日本血液学界の権威の意見を訊いたが、彼はラパロスコピック・スプレネクトミーには反対でした。日本では、未だ実施例がないと言っていましたよ。」

「日本で実施例がないとは驚きです。アメリカでは極めてポピュラーな手術です。」

「で、あなた御自身はどのくらい経験をお持ちなのですか。」

「十回以上はやっているでしょう。すべて成功です。」

「十回ねえ。いずれにしても、私は反対です。」

「麻子さんはもう大人です。これは親が決める問題ではない。彼女自身に決めてもらいましょう。」

心配していたはずの麻子が、何故か賛成に回った。恐らく、腹部に傷がつかないというのが大きな魅力だったのだろう。本人がやると言うのだから仕方がない。私は渋々了承した。

手術の当日、私が病院を訪ねたときは既に手術は終わって



Laparoscopic Splenectomy
 (「ウィキペディア」より)

いた。麻子は病室のベッドで明るい表情で私を向かえた。「ちっとも痛くなかったわ。明日には退院できるらしいわよ。」

これには少なからず驚いた。自分が学生時代に受けた虫垂炎の手術でさえ、術後は一週間入院した記憶がある。

日本の外科手術は患者に過保護なのかもしれない。ベッド数の不足を嘆く前に、手術後の入院期間を大幅に短縮する必要があるのではないかとさえ思った。

それから二十年。日本では腹腔鏡による手術が今頃物議をかもしている。この分野での日本の技術は大きく遅れているのではないだろうか。

一方、麻子の方は現在二児の母親。米国在住の経験を活かして、現在首都圏の五大学で英語の非常勤講師を務め、忙しく飛び回っている。

(了)

【二〇一五年四月記 原稿用紙五枚 課題「空」】